

贅崎砲台(別名無)(指定無)(津市港町18)(青果市場)

十八世紀後半、日本の近海に出没する外国船が多くなりはじめ、十九世紀に入ると、露・英・米などの軍艦や貿易船・捕鯨船で日本に立ち寄るものがますます多くなりました。幕府は、文化三年(一八〇六)、外国船を穩便に帰すとともに漂流船には薪水を与えることとし、一方では警備を嚴重にすることを命じました。その後、外国船の暴行事件を契機として、文政八年(一八一) 異国船打払令を出しましたが、モリソン号事件や阿片戦争などもあって、天保十三年(一八四二)には文化三年の令に復帰しました。すなわち天保の薪水給与令です。そして、嘉永六年(一八五三)のペリー来航、翌七年の日米和親条約の締結を経て、日本は開国しました。

こうした動きの中で、日本国内では攘夷論が刻々と高揚し、伊勢・志摩地域でも海防急務の声が盛んになっていました。津藩では、幕命を受けて南伊勢・志摩の沿岸防備や伊勢神宮警護の任に当たり、度会郡の二見や今一色に砲台を築いていました。そして、文久三年(一八六三)には、津藩の海の玄関口を守るために贅崎にも砲台を築きました。

砲台築造用の土砂は青谷付近から陸路で運んだり、岩田川上流の山地から舟で運んだりして、数十日で完成したそうです。県史編さん室所蔵の「贅崎砲台図」を見てみますと、海岸に向けた砲台正面に六門、南北両脇に五門の大砲を備えていたことがわかりますが、実戦として使われることはなかったようです。

この砲台跡は、その後、長く「御台場」の名で市民に親しまれていましたが、昭和四十年頃に整地され、青果市場などになってしまいました。

さらに、津藩は、贅崎砲台の完成後に引き続いて西浦砲台も築きました。そこは、伊勢街道筋で小舟の荷降し場でもあり、後背の武家屋敷一帯も警護することができる好適地でした。約三ヶ月で完成したようですが、実際に大砲が装備されたかは不明です。この砲台跡は、現在の塔世橋のすぐ上流で、旧市町村会館の西側の場所に当たります。

三重県教育委員会『三重の近世城郭』による

紹介するのは「郭外官地絵図贅崎(にえざき)砲台図」と「神領一色村御砲台絵図」だ。

郭外官地絵図贅崎砲台図は、津藩が外国船の来航に備え、海岸防備のため1863(文久3)年に津城海口の贅崎に築いた台場の図だ。縦51センチ、横65センチで、土盛り部分を緑色としているほかは、墨書きされている。

この図によると、台場の総面積は2060坪、平地部分が950坪で、台場そのものは変形六角形。海岸部に面した場所にメインの大砲が6門、それぞれ間口2間、奥行き3間の板屋根小屋に据え付けられ、周囲にも間口1間、奥行き9尺の五つの板屋根小屋に1門ずつ大砲が設置されていた。

神領一色村御砲台絵図は、津藩の支藩だった久居藩が神宮領一色村(現伊勢市)に築いた台場の図で、大きさは縦78センチ、横157センチ。64(元治元)年10月のものだ。

台場は五角形で、図には「今般神宮警衛のため字向崎の塩浜へ御砲台を御取立」とあり、敷地代として米8升3合8勺余りが下されるという取り決めが行われている。この図や別の史料から、この台場は64年3月に普請を開始し、10月には完成したことが分かる。

幕末期に津藩、久居藩の台場が相次いで建設されたのはなぜだろう。それには時代背景と幕府の政策が関係している。

江戸時代の後期になると、諸外国の植民地政策に伴い、日本近海には外国船が出没するようになった。幕府は鎖国政策によって外国船の排除を目指すとともに、海防を重視した。さらに天保の改革期には、全国的な海防強化政策を取り、幕府は1842(天保13)年、津藩に神宮近海の防衛を命じた。そして開国後の58(安政5)年に神宮警衛を津藩へ指示し、63年に鳥羽、野村(大垣藩の支藩)、尾張、久居各藩が神宮警衛に加わった。

津藩を例にとれば、具体的な警衛体制が整えられるのは62年以降、津藩が神宮防衛のため二見(現伊勢市)に大砲を備え付けてからだった。62年9月に神宮警備にあたり、山田奉行にも掛け合って大砲を内宮、外宮に各2門献納した。

この4門は間口7間、奥行き5間ほどの大筒小屋を建設して二見に配備され、12月には4門の試し撃ちも行っている。さらに63年2月、今一色村での台場の建設に取り掛かった。

外宮の門前町だった山田や付近の村々から手伝い人足を毎日50~60人差し出すよう命じ、今一色村、西村、荘村の北三郷には人足の代わりに日々の茶の世話をさせた。そして3月には藩主藤堂高猷(たかゆき)の巡視が行われ、5月14日に台場が完成したことが伊勢神宮の「長官日記」に記されている。

このように津藩、久居藩は幕末期に領内の海防と神宮警衛のため、伊勢湾入口にあたる神宮領に多くの台場を建設したのだった。

(三重県史編さんグループ 藤谷 彰)による

遺構等：堀跡
築城年：文久3(1863)
築城者：藤堂
歴代城主：藤堂高猷
形式：台場

道案内：国道23号で安濃川を「塔世橋」で南へ渡り、900m程南下した「三重会館前」信号を左折します。1km程東進した信号を右折し、300m程南下すると、道路左手に「青果市場」があります。この付近一帯が砲台跡です。

感想：砲台跡は青果市場になっていますが、周囲に水堀跡があります。すぐ東側の入り江は津港で、そこから海が見え、この地に砲台を置いた理由が分かるような気がします。ただ、あちこち藪だらけだったので、草を刈ったらもうちょっと眺めがいいのかも？と思いました。

歴史：文久3年(1863)、津藩の海の玄関口を守るために藤堂高猷が築いた。

「ちえぞー！城行こまい」による

